

研究論文

教師の成長を促す研修教材「クロスロード教育相談編」開発の試み
—教育相談における教師の葛藤の分析—

網谷 綾香*

Development of the Training Material
“Crossroad-School Counseling Version”
—Analysis of Teachers' Conflicts in School Counseling—

Ayaka AMITANI*

【要約】

教育相談上の問題に対峙する教師の葛藤を活用した、教員研修用教材開発の試みについて報告した。「クロスロード教育相談編」は、防災教育用に開発された「クロスロード」(矢守ら, 2005)の手法を援用したカードゲーム形式の研修用教材である。本稿では、教材の葛藤場面のシナリオを作成するため、教師が教育相談で出会う葛藤状況を、自由記述による質問紙調査により明らかにした。85名の教師の回答を分析し、葛藤の様相について考察した。

【キーワード】

クロスロード, 教育相談, 教員研修, 教師の葛藤, シミュレーションゲーム

1. 問題と目的

(1) 教師の葛藤と成長

教師はストレスフルな職業と言われており、彼らのメンタルヘルスの悪化は、児童生徒にも影響を及ぼすことから、喫緊に取り組むべき社会問題である。教師のメンタルヘルスに関する研究は、心理学や教育学、社会学など様々な分野から行われてきたが、研究の関心は教師ストレスやバーンアウトなどの影響因を見出すことに集中してきた。様々な要因の中でも、児童生徒への「指導・援助上の困難性」は、多くの研究において重要な教師ストレスと取り上げられている(高木・田中, 2003; 田上・山本・田中, 2004; 岡本・網谷, 2009など)。特に、不登校やいじめ、非行、発達障害をめぐる問題など、教育相談に関わる領域においては、教師が「指導・援助上の困難性」に直面することも

多いことから、悩む教師への支援のあり方を検討することは非常に重要である。

その一方で、教師が児童生徒への指導・援助に悩み葛藤することは、「教師の成長」というポジティブな影響をもたらす契機となりうる。不登校生徒との関係に悩む教師を対象とした筆者の研究(網谷, 2001)でも、既存のやり方や価値観では打開できない葛藤状況に陥った教師が、生徒や保護者との相互作用の中で模索しながら、自らの新しい価値観や関わりを見出していく成長過程が見出されている。教師のメンタルヘルスの現状や、児童生徒との関係が教師ストレスや教師の成長に及ぼす影響の詳細については網谷(2012)で詳細に論じたが、教師の葛藤を成長につながる重要な契機として取り上げた研究は、筆者の研究の他には都丸(2005)の一連の研究などがわずかにあるのみである。

*佐賀大学文化教育学部

また、これまでの臨床心理学的研究においては、悩む教師への支援として、コンサルテーションや教育相談システムのあり方を検討した研究が事例研究を中心に行われてきた。しかし、より予防的・開発的な視点から、どのようにすれば教師の教育相談に関する理解や気づきを深め、教育相談に関わる教師としての成長を促すことができるのかについて、その方法を模索した研究は少ない。

以上のことから、筆者は教育相談における教師の葛藤状況を「教師の成長を促しうるポジティブな岐路」と位置づけ、これを積極的に活用した教育相談研修のあり方を検討している。

(2) 葛藤状況を活用した教材「クロスロード」ゲーム

葛藤状況を活用した教育研修用教材に、「クロスロード」¹がある。「クロスロード」は、矢守・吉川・網代（2005）が防災対応シミュレーションゲームとして開発した手法である。矢守らは、阪神淡路大震災を経験した被災者を対象に聞き取り調査を実施し、そこで語られた極限状況の中での葛藤を防災教育に取り入れた。このゲームの手法はその後広がりを見せ、感染症対策や子どもの生活習慣病予防など、幅広く活用されている。

ゲームの流れは以下の通りである。参加者は5名程度のグループを作り、各自「Yesカード」と「Noカード」を持つ。トランプ大のカードによって、苦渋の選択を伴うような葛藤状況が書かれた問題が提示される。参加者はその問題に対し、各々「Yes」か「No」の2者択一の判断を行い、カードをふせたまま出す。もしくは、そのグループの中で「Yes」と「No」のどちらが多数派かを予想し、多数派と思われるほうのカードを出す。カードが出そろったら一斉にカードをオープンし、自分の判断が多数派の意見であれば「青座布団」が与えられる。また、唯一1人の希少意見であれば「金座布団」が与えられる（この場合、多数派の「青座布団」は与えら

れない）。その後、なぜ自分がその判断をしたのかグループで話し合う。同じ手続きを問題カードごとに繰り返し、最終的に座布団を多く獲得したものがゲームの勝者となる。

このゲームで重要なのは意思決定後のグループ内の振り返り、他者との対話である。ゲーム終了後には、「クロスロード」と呼ばれる振り返り用のシートを活用することにより、視覚的にYesとNoそれぞれの判断の問題点を具体的に把握することもできる。振り返りの作業を通して参加者は、自分とは異なる意見・価値観の存在に気づく。他者を介して想定外の意見に出会い、提示された問題に対し「終わらない対話」（吉川・矢守・杉浦，2009）を繰り広げることがこのゲームの本質である。吉川らによれば、このゲームで学ばれるのは「最適解（正解）」ではなく、多様な視点・多様な解に触れることによる「問題の構造」の理解である。

(3) 「クロスロード教育相談編」について

筆者は、矢守ら（2005）の「クロスロード」の手法を援用し、教育相談上の教師の葛藤を扱った研修用教材「クロスロード教育相談編」を開発することとした。²

教育相談領域において、教師は様々な問題に直面し、葛藤を抱きながら活動している。教師には、多くの情報を収集し問題の構造を明確化した上で必要な支援や可能な支援を判断する力（アセスメント能力とも言い換えられる）が求められる。「クロスロード教育相談編」で行う研修は、こうした教師のアセスメント能力を育てる効果が期待される。また、他者との相互作用を通して自らの価値観（教育観や子どもに向き合う姿勢など）への気づきを促進する効果を持つと考えられることから、教師の成長を促す教材としての有用性が期待される。同様の観点から保育者の葛藤を扱った「クロスロード発達支援者版」（梅崎・坂口，2010）もあり、保育者向けの研修会などで使用されている。

「クロスロード教育相談編」によって行う研

¹ 「クロスロード」とは、英語で「岐路」「分かれ道」を意味する。

² 本教材開発にあたっては、「クロスロード」開発者と2011年に覚書を交わし、制作の許可を得た。

修により、自らが提示された問題と似たような葛藤を抱いているような場合には、その葛藤を解きほぐし、新しい活路を見出すことができるかもしれない。経験の少ない教師にとっては、事前にシミュレーションの場が提供されることになる。これは、彼らが実際の葛藤状況に直面した際にメンタルヘルスがおびやかされることなく「健全に悩む」ための、予防的な研修になりうると予想される。

なお、今回開発する教材の対象者は、小学校・中学校・高校の教師を想定している。幼稚園については、「クロスロード保育者支援版」が活用できると思われるし、特別支援学校については、シナリオで提示する葛藤状況が、特別支援学校での教育相談場面においては該当しないケースが多いと考えられるためである。ただし、幼稚園や特別支援学校の教師が、小学校・中学校・高校の教師になったと想定して本ゲームに参加することは可能であり、その場合にも教師にさまざまな気づきをもたらす成長を促す可能性は十分にある。

(4) 本研究の目的

教材開発にあたっては、まず、ゲームで提示する葛藤状況のシナリオを作成する必要がある。基礎データを収集するために、まず、小学校・中学校・高校の教師が教育相談の業務に際しどのような葛藤を抱きやすいかについて、質問紙調査によって明らかにすることにした。

2. 方法

(1) 手続き

2011年8月から10月にかけて、教師を対象とした無記名での質問紙調査を実施した。教員対象の3つの講習会会場で返信用封筒を添付した質問紙を配布、持ち帰り回答を依頼し、郵送にて回収した。3会場で452部配布、86名からの回答が得られた。回収率は19.0%であった。

(2) 質問紙

「教育相談場面における教師の葛藤と判断についてのアンケート」として、これまでに教育相談の場面でどのような迷いや葛藤を経験した

かについて自由記述で尋ねた。回答を促すために、「不登校」「問題行動・非行」「いじめ・友達関係・学級経営」「進路・学業」「発達障害」「子どもとの関係づくり・保護者対応」「管理職や同僚との関係・連携」「外部機関・専門家との連携」「その他」の欄を設け、一部の該当箇所のみでもよいので記入するよう求めた。葛藤場面については、参考とするために、以下のような事例を提示した。

(例) 中1の不登校の女子生徒を担当した時に、本人から家庭訪問を拒絶された。親からも「できるだけ来ないでほしい」と言われ、それでも家庭訪問を続けるべきかどうか、非常に迷った。

さらに、その葛藤状況において自分が最終的にどのような判断や選択をしたか、また、その判断理由についても記述を求めた。

(3) 分析対象者

幼稚園教諭1名をのぞいた85名（小学校36名、中学校29名、高塔学校14名、校種不明6名）の回答を分析対象とした。

3. 結果と考察

(1) 葛藤状況のカテゴリ化

自由記述の中には、葛藤まで至らないより混沌とした悩みも多く見られたが（95件）、それらについては分析から除外し、明確に「葛藤場面」と判断できるもののみを抽出したところ、全体で149件の葛藤状況が得られた。

個々の葛藤状況にラベルを与えコード化し、類似の葛藤場면을カテゴリ化した結果、表1に示したような結果となった。

表1 教育相談における教師の葛藤の概要

葛藤状況のカテゴリ		件数
不登校 (41)	登校刺激のあり方についての葛藤	17
	保護者との連携に関する葛藤	11
	不登校の子本人への指導に関する葛藤	4
	自分の関与のあり方に関する葛藤	5
	退学にかかわる葛藤（高校の不登校）	2
	その他	2
発達障害 (31)	本人尊重か社会性や集団の尊重かの葛藤	8
	保護者との連携に関する葛藤	14
	周囲の児童生徒へのカミングアウトや説明に関する葛藤	5
	その他	4
進路 学業 (14)	本人の進路選択を支持するか否かの葛藤	7
	親子で進路選択が対立した時の対応に関する葛藤	2
	特別支援学校進学を勧めることについての葛藤	3
	その他	2
非行 問題行動 (17)	本人への指導や関わり方に関する葛藤	5
	保護者との連携に関する葛藤	9
	その他	3
いじめ 友人関係 学級経営 (18)	全体指導か個別対応かにまつわる葛藤	3
	保護者との連携に関する葛藤	3
	友人関係への介入のあり方に関する葛藤	7
	いじめ事実が不明確な時の対応に関する葛藤	2
	その他	3
その他の子どもとの関係に関する葛藤		5
その他の保護者との関係に関する葛藤		7
同僚や管理職との関係・連携に関する葛藤		8
外部機関や専門家との連携に関する葛藤		4
その他		4
合計		149

表2～7に、具体的な葛藤場面を示す。葛藤の状況について詳細に記述している回答もあったが、個人が特定されないように、本質をそこなわないように配慮して簡潔にまとめ、一部表現や内容を変更した部分もある。なお、表1において「その他」に分類された4件については、かなり個別的な事例であったため、記載していない。

これらの葛藤を分析し、「クロスロード教育相談編」のシナリオとしてどのような葛藤場面

を設定するのがふさわしいのかについて考察する。

(2) 不登校に関する領域での葛藤

不登校に関する葛藤が41件ともっとも多く、中でも、登校刺激のあり方についての葛藤が多く見られた。本人の気持ちや状況に配慮しそつと見守る態度で臨むのか、それとも学校や教室復帰に向けてのサポートをするのかという葛藤は、典型的な葛藤場面であると考えられる（筆者が本質問紙調査で葛藤の事例として例示したのも、このためである）。No. 8の回答にもあるように、以前は登校刺激が積極的に行われる傾向があったのが、神経症タイプの不登校への理解が進むにつれて刺激は控え「待つ」対応が浸透するようになった。さらに現在では、「ただ待つだけでは状況の改善にならない」「主体的な社会的自立や学校復帰に向けて、周囲の者が状況をよく見極め、適切な働きかけをすることが重要」（文部科学省、2003）とされている。この「状況をよく見極める」、すなわち、不登校児童生徒の現状のアセスメントを適切に行った上での対応が非常に難しく、判断に迷うところである。葛藤事例では、本人の気持ち、体調、家庭環境などを考えると無理はさせられない、しかし、このままで（登校できなくて）いいのか…という葛藤がうかがえる（No. 1, 4, 6, 9 など）。

高校においては、単位修得の問題があり、不登校が長期化すると留年や退学の事態につながるため、見守る対応に焦りを感じることも多い（No. 14, 15, 16）。そして、生徒が退学を希望してきた際にも、本人の意思を尊重すべきか、生徒の将来を考えると引き留めるべきではないのかという思いの間で葛藤することになる（No. 38, 39）。特に高校教師に特有の葛藤として、注目すべきである。

また、相談室登校の場合にも、不登校児童生徒を前に、相談室をこのまま居場所として提供し続けるのがいいのか、教室に促すべきか、と悩みがちである（No. 10）。保健室登校の場合でも教室に促すべきか否かという葛藤が生じるが、

さらに養護教諭の負担という問題も加わる。養護教諭は、病気や怪我の児童生徒への対応や事務仕事などを1人でこなす必要があり、負担を感じやすい。加えて、No. 11の事例では別に教育相談室がある。このような場合に、養護教諭が負担を抱えてまで相談室機能を提供し続ける必要があるのか否かについては判断が難しい。伊藤（2003）の調査でも、保健室登校生徒を抱える養護教諭の多忙感や、対応上の迷いが報告されている。それによれば、養護教諭の多くは相談活動を自分の仕事と位置づけながらも、保健室業務の傍らカウンセラー役を果たすことには悩みや不安も強いことが示唆されている。

ところで、No. 2の事例では、不登校の状況を見極めた上で、本人のためには一緒に好きなことをする対応が適切であると判断し関わっているが、長期化する中で自分のわずかな空き時間を使うことの負担感との間で葛藤している。こうした教師の負担感については、No. 34の「自分の学級に追われ、迎えを続けるべきかどうか非常に迷った」という葛藤の背景にもみられる。継続的な関わりを続けることは、不登校の子どもにとっては意義あることと思えるが、担当する教師にとっては負担も大きく疲弊してしまうことすらある。網谷（2001）が行った不登校の児童生徒と関わる教師へのインタビュー調査においても、こうした負担感は顕著に見られていた。同僚や管理職のサポートや理解がないままにこうした状態が続くと、場合によってはバーンアウト状態に陥ることもあった。一方、サポートする同僚の側（例えば教育相談係など）にも、担任への気遣いから葛藤が生じることがあることが明らかにされた（No. 36, 37）。

保護者との間でも、児童生徒の場合と同様に、家庭訪問や電話連絡は必要だと思う一方で、保護者の精神的負担になる可能性があるため、思い悩む事例がみられた（No. 24, 28）。このような状況で、No. 27の事例のように教育相談係などから連絡を取る必要性を迫られると、当該教師の葛藤はさらに強くなると思われる。また、「家庭の問題にどこまで立ち入るべきか」とい

う葛藤もある（No. 19, 20, 22）。保護者の子どもへの対応についても、子どものためには助言したいが、保護者の思いやプライドを傷つける可能性があり、関係悪化の原因にもなり得るため慎重にならざるを得ない（No. 25）。

No. 41については特殊なケースであるが、自分の子どもが不登校になったという保護者としての経験である。明確に記述されているのは「我が子に登校を促すべきか否か」という葛藤ではあるが、「子どもを残して仕事に行くことの辛さ」の背景には、仕事も大事だが自分の子どもに寄り添いたい、という葛藤もみえる。教師もひとりの人間であること、個人としての生活と仕事との狭間で葛藤するケースもあることを、クロスロードを通して考えてみてもよいかもしれない。

（3）発達障害に関する領域における葛藤

発達障害に関わる領域においては、児童生徒の持つ特性（個性）に配慮し彼らに合わせた対応をするのか、周りと同じような指導をして本人の社会性を育てようとするのか、という葛藤が共通して見られた（No. 42～49）。特に通常学級においては、周りの児童生徒への指導にも影響し場合によっては集団の規律が守れなくなることもあるため、こうした悩みが顕著となりがちである。

保護者との連携に関しては、発達障害の可能性がある際にそれを保護者に伝えるか否か、病院を勧めたり専門家に紹介したりするか否か、といった葛藤が目立った。また、同様に特別支援学級を勧めることに関わる葛藤も多い。No. 50, 51, 53, 61などに見られるように、保護者が病院受診や検査、特別支援学級に入ることを受け入れにくいことも多く、このような場合に特に教師の葛藤は強まるようである。知的発達の遅れを伴わない自閉症スペクトラムやADHDなどの場合、障害への気づきが遅れがちになり、保護者が育てにくさや不安を長期的に抱え続けているケースも多い。こうした保護者の心理については、子どもの障害を認識することのそもそもの難しさや、診断後も普通になることへの

期待が続くこと、障害認識が安定した後も子どものつまずきに直面することで障害認識の葛藤を再び体験することなどが、多くの研究で指摘されている（山根，2010；柳楽・吉田・内山，2004など）。教師は，子どもにとって適切な教育環境や支援を提供するために受診や検査を勧めたいという思いの一方で，保護者の葛藤や傷つき，場合によっては拒否的な反応を前に，保護者の思いに配慮し寄り添うべきかと葛藤することになる。さらに，学級内で対人トラブルが生じたり，授業の進度が遅れたりすると，教師の葛藤は強まることもある。No. 61の事例では，通常学級で教育を受けさせたいという保護者の思いと，クラスメイトの保護者からの要望との狭間で葛藤していた。

通常学級の担任教師には，障害のある児童生徒の周りにいる子ども達に対して，障害があることや障害の特性を伝えることをめぐる葛藤も生じやすい（No. 64～68）。本人や保護者の意向，周りの子の発達段階やクラスの雰囲気，障害のある子と周りの子との関係性など，さまざまなことを考慮した上で，伝えるのか否か，伝えるとしてもどのように伝えるかについて考える必要がある。例えば，No. 65では「障害や困難という言葉は使わずに，曖昧に」伝えたという。一方，No. 68では明確に伝えていた。後者のケースは高校であり，周囲の生徒が気づきつつある状況もあった。この教師の判断は以下のようなものであった。「伝えていいかどうか母親と率直に相談した。病院の先生にも話を聞いた上で，このクラスの生徒なら理解してくれると判断し，本人には席を外させて告げた。生徒もうすうすわかっていたようで，黙って聞いていた。結果的には良かったと思っている」。相川・仁平（2005）によれば，障害を説明することは，誤解を解消し摩擦を予防する，障害のある子の活動と社会参加を促進する，“人間の尊厳”について考える機会を提供するといった意義がある。しかし一方で，伝え方を間違えると，逆に誤解や偏見を招いたり，本人がネガティブな意味での特別扱いをされてしまったりする恐れもあるため，

教師は判断に迷うのである。

（4）進路や学業の領域における葛藤

受験や進路選択は，児童生徒の将来にも関わる重大な決定でもあり，相談に関わる教師も悩むことが多い。生徒の進路選択をめぐる葛藤では，①本人が合格する可能性の低い受験先を希望している場合（No. 73, 75, 76）と，その逆の，②学力優秀にも関わらず進学を考えていないような場合（No. 74）があった。いずれにしても，本人の意思を尊重して希望通りにさせるのか，教師としての意見を伝えるのかの葛藤が生じていた。高校の進路相談に関する研究を行った落合・佐藤・岡本・国本（1995）は，進路相談をする際，教師が温かく親身な母性的な対応をすることは基本である一方で，教師自身が広い知識と情報をもち，生徒がいま迷っている人生の選択や決断の意味やその決断の是非を指摘するような対応，いわば父性的な対応も重要であることを指摘している。両者の対応の間で，教師は揺れ動くこととなる。また，親と本人の意見が対立した場合に教師がその狭間で悩むケース（No. 80, 81）もある。No. 80においては，教師は最終的に以下のような判断をしていた。「最初は本人の意思も尊重しながら，（適切な進学先を）アドバイスもしようと考えていた。しかし，アドバイスをすることで，先生も親と同じと感じ学習意欲をなくすことにもつながりかねないと思った。本人の夢や考えもしっかりしていると判断したこともあり，本人を励まし，本人の気持ちを親に伝えた」。

さらに，領域としては（3）の発達障害に関わる問題でもあるが，特別支援学校への進学を勧めるか否かの葛藤（No. 82～84）も見られた。

（5）非行・問題行動の領域における葛藤

非行や問題行動の領域においては，不適切な行動は原則として指導するのが基本的な教師の関わり方である。しかしその行動の背景には，さまざまな家庭的な事情や心理的問題が影響しているケースも多いことから，児童生徒を理解するためには問題行動を指導する前に，信頼関係を築き，「話を聞くことも必要」（No. 90）で

ある。とはいえ、No. 88の事例でみられたように、他の児童生徒に悪影響を及ぼすケースもあることから、「当人を切り捨てることは忍びなかったが、その他の生徒の学習環境を守るため登校させない」といった判断も時には必要となる。

一方、No. 89の事例では、問題行動の背景に家庭の問題があると判断した教師が、「お弁当をこっそり渡す」ことで、生徒とつながりを持とうとしていた。しかし、「教師として」の関わりのある方としてそれが本当に正しい行為なのか悩んでいたようである。また、No. 91の事例では、喫煙行為を指導するかどうか迷った末、結果的には「不登校状態に入ったばかりの頃だったので、生徒との関係づくりが先だと考え、気づかぬふりをした」とある。この事例では、喫煙行為を指導することが黙認している母親との関係を悪化させる可能性もあり、それが判断に影響していると考えられた。このように、非行や問題行動の領域では、あえて原則的な指導の枠を外れた対応を行うことも少なくない。

この傾向は保護者への対応でも同様である。基本的に児童生徒の問題行動については、保護者に連絡するのが通常であるが、様々な事情を抱えた家庭や子どもの問題行動を冷静に受け止められない保護者もいるため、判断に迷った末、あえて問題行動を伝えないケースもあった（No. 93, 94, 95）。その一方、「クラスの他の子どもや保護者から家庭に伝わるよりもは、担任がきちんと伝えるほうがよい」と判断し、伝えたケースもあった（No. 92：ただし、伝えた後に保護者の反応について本人からの情報を得ながら対処しフォローしていた）。

特徴的だったのは、養護教諭の葛藤である。No. 103の回答にあるが、養護教諭は様々な問題行動の情報や生徒の秘密を知り得る立場にある。「誰にも言わないでほしい」と打ち明けられるケースも多いが、緊急に対応が必要な場合もあり、どこまで胸にとどめておくか判断が難しい。No. 103の教師は「命に関わることに限っては、他の教師や保護者に援助を求めた。信頼関係上、

成長の一段階と思ったら聴く事にとどめた。でも難しい、今でも迷う」と葛藤を語っている。

(6) いじめ・友人関係等の領域における葛藤

いじめについては、学級全体で取り上げて指導するのか、個別に対応するかで迷うケースがみられた（No. 104～106）。いじめは、加害者と被害者だけの問題ではなく、周囲の傍観者や聴衆もふくめた構造をなしており、学級全体の問題として解決に取り組んでいく必要がある。しかし、その一方で、No. 106の回答にもあったように被害者がそれを望まない場合もあり、全体で取り上げることがしにくいこともある。いじめ被害者は、加害者からの報復への恐れや恥ずかしさから、問題が公になるのを望まない傾向があるが、一方で、つらい気持ちを理解してほしいという思いを抱いている。そうした本人の微妙な思いをくみ取り、実名や誰であるか特定できる情報を省いたうえで、クラス全体の問題として取り上げた事例もあった（No. 105）。

いじめは、被害者の立場にたって支援していくべきとされているが、児童生徒が「いじめ」と訴えていても、いじめの実態が認められない場合もある。本人の主観的な事実と客観的な状況の狭間で、教師は対応に悩む。No. 117, 118の事例では、いずれもいじめを訴える本人に個別に話をきき実状を説明しつつ、日常の学校生活で一人にならないよう目を配る、進級時にクラス編成を配慮するなどの対応をとっていた。いじめまではいかないが、児童生徒同士の関係が良好でない場合に、介入すべきかどうかの葛藤も見られた（No. 111, 112）。特に小学校高学年以降の女子関係への対応で悩むケースが多いようである。こうした問題は、介入して関係を良好にするよう働きかけるのか、成長の一過程として捉え見守るほうがいいのか、判断が難しい。また、小学校高学年において男子と女子の関係が良好でない場合に、介入するべきかで悩むケースもあった（No. 110, 113）。

(7) その他の葛藤

No. 122と126は、バレンタインチョコレートや誕生日プレゼントのやりとりをどう扱うかの

葛藤であった。贈り物には児童生徒の教師への思いがこめられており、その子との関係作りのためには贈り物のやりとりを通して情緒的な交流をはかるという考え方もある。一方、現実的な物のやりとりを行うことで、逆に情緒的な交流が阻害されてしまう可能性もあるし、場合によっては生徒の恋愛性転移を増幅させてしまうこともある。また、特にNo. 122の場合には学校の規則で明確に禁止されている行為であることもあり、それをやぶってまで受け取っていいのか、他の児童に見られた時に示しがつかない、という問題も出てくる。No. 126では、お返しとしてその生徒にだけプレゼントを渡す行為が他の生徒との不公平を生むことになるため、メッセージを渡し、クラスみんなで食べられるお菓子をを用意するという対応を取っていた。

保護者との関係については、すでに、不登校や発達障害など各領域で記述してきたが、その他にも、過度の要求やクレームに対する問題や、保護者の子どもへの関わり方に教師として言及すべきかどうかの葛藤がみられた。

同僚や管理職との関係・連携に関する葛藤でもさまざまな葛藤がみられ、No. 136のように管理職と生徒・保護者との間で葛藤する事例、No. 138のように生徒のために教育相談を充実させたい思いと多忙な教師に負担をかけたくない思いの間で葛藤する事例などがあった。なお、この領域の葛藤は8件と一見少ないが、明確な葛藤ではないものや教育相談とは直接関係のない悩みも含めれば、26件の回答があった。無記名の調査とはいえ、回答に抵抗のある項目でもある。実際には、ここに表れている以上に多くの教師が同僚や管理職との関係で葛藤や悩みを抱えているのではないかと推察される。

外部機関との連携について、虐待を通告するか否かの判断で迷った事例があった（No. 142, 143）。教師には虐待の疑いがあれば通告する義務があるが、どの程度であれば虐待疑いとしてよいのかその判断が難しいケースもある。通告によって保護者との関係が壊れることを恐れたり、通告がその家族に重大な影響を与えること

を懸念し慎重になったりする一方で、児童生徒の安全を考えれば一刻も早く事態を改善したい思いもある。

その他、様々な葛藤が語られており、いずれもリアルな教師の現状を知る上で参考となるものであった。

(8)「クロスロード教育相談編」完成にむけて

本調査を通して、多くの教師の葛藤事例を抽出することができた。「クロスロード教育相談編」のシナリオ作成にあたっては、共通して多く挙げられていた典型的な葛藤を取り上げるのと同時に、少数もしくは単一エピソードでも教師の新たな気づきを促しうるものについては、シナリオとして採用することを検討する。

以下に示したのは、No. 123の事例をもとに作成したシナリオの仮案である。クロスロードのシナリオはこのようにごく短い文章（70字から100字程度）で提示される。

＜あなたは…担任＞ 友達関係に悩んでいる女子がいる。日常的に声かけをしているあなたに、彼女がバレンタインのチョコを持ってきた。学校ではチョコを持ってこないよう指導している。あなたはチョコを受け取る？

YES（受け取る）／ NO（受け取らない）

状況は曖昧であり判断を下すための情報は少ないが、その中で参加者は事態を様々なシミュレーションしながら自分なりの判断を行うことになる。この問題文をある教育相談の研修会で教師に提示し、クロスロードゲームを実施してみたところ、20名の教師のうちYesが11名、Noが9名と判断が分かれていた。クロスロードゲームのシナリオとしては、このようにある程度判断が分かれるような問題文のほうが、その後の対話を活発化させるのには有効であると考えている。

今後は、教育相談の担当をした経験のある教師やスクールカウンセラー経験のある臨床心理士らの協力を得て、シナリオを厳選していく。

シナリオ完成後は、「クロスロード教育相談編」の試行版を、教師や教師を目指す学生に実施し、自己評価チェックリストや事後インタビュー、ゲーム進行の観察などを通して、教材としての教育研修効果や問題点の有無を検証する予定である。また、研修を行うファシリテーターがどのような点に配慮して活動を行えば、より教師の成長を促すことができるのかについても合わせて検討し、その役割を明確にした上で、ファシリテーター用実施マニュアルを作成する。

本調査の自由記述の中には、葛藤まで至らないより混沌とした悩みも多く書かれていた。何をどう考えていいのかわからないという状態から抜け出すためには、まず問題をより丁寧に見立て構造化する力が必要である。教師が“葛藤できる”ということは、ある程度何らかの見通しを持っており、判断の一方手前—すなわち、Aの道を選ぶかBの道を選ぶかの岐路（クロスロード）まで一たどり着いているということでもある。「クロスロード教育相談編」は“葛藤した上で適切な判断ができる力”を育むためのツールとなりうるであろう。

【引用文献】

- 相川恵子・仁平義明（2005） 子どもに障害をどう説明するか—すべての先生・お母さん・お父さんのために— ブレーン出版
- 網谷綾香（2001） 不登校児と関わる教師の苦悩と成長の様相 カウンセリング研究, 34, 160-166.
- 網谷綾香（2012） 児童生徒との関係からみた教師のメンタルヘルス 心理学研究の新世紀④ 臨床 心理学ミネルヴァ書房 深田博己（監修） 岡本祐子・兒玉憲一（編著） pp. 193-207.
- 伊藤美奈子（2003） 保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識—スクールカウンセラーとの協働に注目して— 教育心理学研究, 51, 252-260.
- 吉川肇子・矢守克也・杉浦淳吉（2009） クロスロード・ネクスト 続・防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション ナカニシヤ出版
- 文部科学省（2003） 今後の不登校への対応のあり方について
- 落合良行・佐藤有耕・岡本政博・国本勝正（1995） 進路相談において生徒に望まれる教師の対応 教育心理学研究 43, 445-454.
- 岡本尚子・網谷綾香（2009） 発達障害のある児童に関わる教師の悩みとストレス反応の関連 佐賀大学教育実践研究, 25, 147-156.
- 田上不二夫・山本淳子・田中輝美（2004） 教師のメンタルヘルスに関する研究とその課題 教育心理学年報, 43, 135-144.
- 高木亮・田中宏二（2003） 教師の職業ストレス—教師の職業ストレスとバーンアウトの関係を中心に— 教育心理学研究, 51, 165-174.
- 都丸けい子（2005） 生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究 教育心理学研究, 53, 467-478.
- 梅崎高行・坂口美幸（2010） クロスロード発達支援者版（第1版）
- 柳楽明子・吉田友子・内山登紀夫（2004） アスペルガー症候群の子どもを持つ母親の障害認識に伴う感情体験：「障害」として対応しつつ、「この子らしさ」を尊重すること 児童青年精神医学とその近接領域, 45, 380-392.
- 山根隆弘（2010） 高機能広汎性発達障害児・者の母親の障害認識過程に関する質的検討 家庭教育研究所紀要, 32, 61-73.
- 矢守克也・吉川肇子・網代剛（2005） 防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション クロスロードへの招待 ナカニシヤ出版

【謝辞】

本研究は、学術振興会の科研費・若手研究（B）の助成を受けて実施したものである（課題番号：23730613）。調査研究にご協力いただいた先生方に感謝いたします。

表2 不登校に関する領域における教師の葛藤①

登校刺激のあり方に関する葛藤 (17件)

1. 登校しぶりの子が学校に来た時に、次に学校に来る日を本人と決めて約束させていたが、「約束」が本人にとって負担になるかもしれないと思い、「約束」しない方がいいのか迷った。(小)
2. 突然不登校になった児童。兄の不登校の影響もありそう。登校刺激せず交流を大事にし、空き時間の家庭訪問で好きなことを一緒にする対応を続けたが、登校できない。週1しかない空き時間の訪問は負担。このまま続けるかどうか。(小)
3. 暴力をふるった児童が謝罪の仕方をきっかけに学校に来なくなった。卒業を目前に控えていたので登校を促したかったが、被害者の女兒もあり、保護者同士のトラブルにまで発展。どこまで踏み込んでよいか迷った。(小)
4. 不登校傾向(小6男子)に登校刺激をするべきかどうか。家庭が経済的に貧しく、怠学傾向。(小)
5. 休みがちになったときに、強く登校するように言うべきか、優しく言うべきか迷った。(小)
6. 女兒が体調をくずして欠席がちに。祖母の過保護など家庭環境の影響も。登校刺激をどの程度すべきか迷った。(小)
7. 担任として、登校するように言うかどうか。(小)
8. 20年前くらいは、家から連れ出してくる方向だったので、無理に引き出そうとしていたが、次第に無理やりはいけないという方向になった。現在は、無理はさせず家庭訪問する働きかけをしているが、これでいいのかといつも迷っている。(小)
9. 本人も保護者も家庭訪問を嫌がられる家庭について、家庭訪問すべきか、どのような対応をするか悩んだ。(中)
10. 相談室登校。教室に入るよう、促した方がいいのか、相談室にそのまま居させてよいのか。(中)
11. 養護教諭として、不登校の生徒が突然保健室へ来る様になった。教育相談室もある中でどう対処すべきか迷った。(中)
12. 家庭訪問に行ってもいかなかったり、電話はできるがなかなか会えず、プリントを持って何度も家庭訪問。刺激を控えるほうがいいのかも思ったが、部活動だけ出てくるという状態があり、どう対応すべきか悩んだ。(中)
13. 生徒の状況にもよるだろうが、こちらが登校刺激をした方がよいのか、そうでない方がよいのか迷うことが多い。また、それを保護者にどう理解してもらうか。(中)
14. 副担任。専門医や保護者より「本人に任せて見守るのがよい」と言われたが、単位修得等の問題もあり、迷った。(高)
15. 集団に入るのが難しい生徒で、週数日、保健室登校。留年し、2回目の1年生。単位修得や集団生活をどの程度まで促すべきか。(高)
16. 中学時より不登校気味の女子生徒。入学式より5日間登校した後、欠席。保健室登校なども促すが、登校できず。母親も本人の意思を尊重し待ちたいというが、義務制ではないので出席日数が心配となり、悩んだ。(高)
17. ある学校に赴任し、3年生担任になって1カ月もたたないうちに女子生徒が不登校に。家庭訪問に行っても本人と全く会えず、母親は受け身で、言葉も少ない状態が続く。家庭訪問をずっと続けるべきかどうか迷った。(不明)

保護者との連携に関する葛藤 (11件)

18. 不登校の子に対する親の具体的な支援がない時に、親に会いに行ったがお茶を濁された。親に学校に来ていただいて支援をあおぐかどうか迷った。(小)
19. 6年児童が、1〜5年生まで長期不登校であったが、その原因が保護者からのネグレクト気味な環境であることがわかった。親の悩みを聞きながら子どもに目を向けるよう促すか、子どもの思いを聞くことを優先させるか。(小)
20. 学力は優秀で、生活態度もまじめな大人しい女子の児童(小5)。急に学校を休み、登校しなくなった。ある時の作文に家庭の問題に対する気になる思いが書いてあった。家に報告すべきかどうか悩んだ。(小)
21. ある男子の体のことについて、複数の男子児童がからかっていた。からかわれた男子が、「風邪」と保護者からの連絡の上、学校を2〜3日休んだ。家庭訪問をしようとTELしたが、本人しかなかった。保護者不在の状況で、家庭訪問していいものかどうか迷った。(小)
22. 校区外通学の児童を担任。親の仕事の関係で生活のリズムが昼夜逆転の状態。下校先である校区内の祖父母宅に家庭訪問を続けたが、自宅の母親へのアプローチをすべきか悩んだ。(小)
23. 朝母親と離れる泣き出し教室に入ろうとしない1年生。母親といると自分でできることも甘える場面も出てきたので、母親に帰ってもらおうかどうか迷った。(小)
24. 前年度から母子分離が難しく、不登校だった子を担任。来ない時、家に電話するが、毎日しているとその電話自体が母親を追い詰めるようで、電話をすることを迷った。(小)
25. 親が登校を強く促している時、もっと子どもの声を聞いてみてはと、親に言うべきかどうか。(中)
26. 他の生徒からの電話や声かけに対して、マイナスに受け取る保護者。生徒が誰も電話をしないと「忘れられている」、電話をすると「自分たちが困るから電話しているのだろう」という反応。他の生徒の働きかけをした方がいいのかどうか。(中)
27. 係の先生からは密に連絡をとるように言われたが、保護者から拒否された。(中)
28. 家庭訪問や面談で原因を探ろうとするが、本人もあまり分からない様子。母親は大変神経質で「いじめが原因に違いない」と感じており、本人を追い詰めるので連絡などしてほしくないと要求。何もしないなどありえないと思い、悩んだ。(中)

不登校の子本人への指導に関する葛藤 (4件)

29. 小5で担任したクラスに前学年からの不登校の女子児童がいた。4月に数日登校することができた。しかし、宿題はやってこない。他の児童のこともあり、宿題をやってくるように言うべきかしばく様子を見るべきか迷った。(小)
30. 学級のルールを少し破っている不登校気味の児童に、他の児童と同様に厳しく指導すべきか否か。(小)
31. 本人の怠惰、わがままによって不登校の状態に陥っている場合に、本人そのことに言及するかどうか迷った。(中)
32. 低学力、友人とのトラブル等で学校に足が向かず、ほとんど学校に来ない。その間にピアス、髪染め、深夜徘徊等の非行。たまに学校に来て相談室から動かない、しかし行事等には参加する。髪を染めたま行事に参加させるか、黒にしない限り参加させないか。(中)

表2 不登校に関する領域における教師の葛藤②

自分の関与のあり方についての葛藤 (5件)

33. 家庭環境に問題があった家庭。兄は私のクラスでほぼ登校していたが、妹は隣のクラスで不登校。妹の担任は男性で私は女性ということで、担任より私の方が話しやすいようだった。担任より私に対応した方がいいのではないかと思ったが、どうするか悩んだ。(小)
34. 小4の不登校の女子児童を担任。姉の担任と交代で毎朝迎えに行き、何とか登校できるようになった。進級し、妹だけが小学校登校となった時、私は自分の学級に追われ、迎えを続けるべきかどうか非常に迷った。(小)
35. 前年度の3学期から不登校。担任となり、定期的に家庭訪問はしたものの状況に変化なかったが、関係は作れた。年度が変わり担任も変わった時に、関わりを続けるかどうか迷った。(中)
36. 担任をしていたが、教育相談担当だから他のクラス、学年にも家庭訪問に出向くように言われた。授業数の配慮はしてもらっていた。該当の担任は、私や他のクラスの担任が家庭訪問に出向くのは歓迎されていない様子。(中)
37. 教育相談担当としての、不登校の生徒へのアプローチの仕方。家庭訪問に担任が行っているが、一緒に行った方がよいか迷う。(高)

退学にかかわる葛藤(高校生の不登校) (2件)

38. 学校をやめて働きたいという男子生徒。無理に学校に残して留年させるなら、退学を許して仕事を探させるほうがいいのか迷った。(高)
39. 退学をしたいという生徒に対し、学校に来るよういふべきか、退学の準備をするか迷った。(高)

その他 (2件)

40. 対人恐怖の傾向があり、とても幼い生徒に対し、登山などに連れて行くなどの関わり。これまで通り丁寧に優しく接するか、少し距離を置いたほうがいいのか。(中)
41. 保護者としての経験。小学生の子どもが不登校に。わが子が不登校になるとは思ってもおらず、パニック。子どもを残して仕事に行かなくてはならないことがとても辛かった。登校をしるわが子に登校を促すべきかどうか、ずいぶん迷った。

表3 発達障害に関する領域における教師の葛藤①

本人尊重か社会性や集団の尊重かの葛藤 (8件)

42. 運動会のかけっこで、走らずしゃがみこみ泣く子。練習では、引きずる形になりながらも何度も繰り返し走りゴールする体験をさせた。本番前夜、大泣きする子を無理にゴールさせるほうがいいのかどうか、悩んだ。(小)
43. 休み時間に皆と一緒に遊ぶようにさせていたが、障害のある子には難しい遊びの時、どうするか迷った。(小)
44. 場面緘黙症の児童に対し、授業の際に発言を促すべきか否か悩んだ。(小)
45. ADHDの傾向がある児童で、かなり忘れ物が多い子がいた。周りの子に「忘れ物はいけない」と言っていたので、はじめはみんなと同じように指導していたが、それがいいのかどうか悩んだ。(小)
46. ADHD、アスペルガー症候群の児童が学級の中で孤立し、2次障害が出た。担任として、周りの子たちと、その子自身への対応で悩んだ。その子の思いを聞き寄り添いながらも、ダメなことはダメだと指導することを大切にしようとした。周りの子にその子をわかってもらう努力も必要だと感じた。(小)
47. 片付けができない、字などが正しく写せない児童に対し、他の児童と同様の指導や課題を与えればいいのか。(小)
48. 発達障害をもっていることで起こる日常的なトラブルをどう注意するかで悩んだ。発達障害があるからといって、不適切な言動(つい眠ってしまう、相手の気持ちを考えずに失礼なことを言う)を認めてしまうと集団の規律がとれない、でも配慮はしないといけない。(中)
49. 授業中落ち着きがなく、他の生徒の邪魔をしたりしゃべったりする。注意した方がよいのか、流すか。(中)

保護者との連携に関する葛藤 (14件)

50. あまりにも落ち着かない行動。保護者には個人懇談会などで伝えてきたが、真剣に捉えてもらえなかった。そのままでもいいのか、やはりきちんと伝えるべきなのか悩んだ。(小)
51. ADHDらしき男児。SCとの面談をすすめたいが、母親がそのようなことを受け入れるような人ではなかった。母親に伝えるべきかどうか、非常に迷った。(小)
52. クラスの集団に入れず、クラスの友達とのトラブルが絶えない発達障害疑いの児童。保護者に病院受診をすすめるか悩んだ。(小)
53. 専門機関への相談を保護者に伝えたが、拒否された時、その後どのようにすべきか悩んだ。(小)
54. 知能検査を受けさせるかどうかの具体的根拠(判断)を、どう親に伝えるか。障害の可能性を伝えるかどうか。(小)
55. 高機能自閉症の3年男子。教室から飛び出したり、奇声を上げたりと通常学級では対応が難しい。病院への相談歴はあるが、最近には行っていない。保護者に特別支援学級や再通院を勧めるが、なかなか進まない。どこまで積極的に言うか悩む。(小)
56. ダウン症児童。明らかに他の子と勉強に開きが出てきて、授業中のストレスがみられる。特別支援への入級を勧めようとしたが、親は普通クラスで他の子と同じように授業を受けさせたいと譲らない。(小)
57. 校内の就学指導委員会で、特別支援学級に入れた方がよいとされた児童に対し、その主旨や方向性について親の了解は得られたが、祖父に反対され親も揺れ始めた時、対応に困った。(小)

表 3 発達障害に関する領域における教師の葛藤②

保護者との連携に関する葛藤 (①の続き)

58. 明らかにADHDであり、他の子どもの安全が危ぶまれる子がいた。母親自身もADHD傾向があり、医療関係につながりたいがどうやって話していくか迷った。(小)
59. 発達障害という診断をうけることがよいのか、そこまでする必要があるのか。診断受けることで安心する場合と、逆の場合があり、悩む。診断を受けたことで特別支援学級を入級するように言われ、悩まれる保護者もいる。(小)
60. 通常学級において極端に遅れている生徒のことを、保護者に伝えるべきか。保護者にその障害を受け入れてもらうためにどうしたらいいか。(中)
61. 通常学級在籍のアスペルガーの生徒。宿泊訓練でトラブルがあり、多くの保護者から子どもの安全のために、その子を特別支援学級に入れるよう求める声があがった。一方、その子の母親は普通学級を望んでいた。双方の保護者の気持ちがわかるので、どうすべきか悩んだ。(中)
62. 発達障害かと思われる子の保護者へ伝えるかどうか。(不明)
63. 発達障害かと思われる子の判断をしてもらうため、保護者の承諾なしに専門家に様子をみてもらうかどうか。保護者が許可するかわからない状況だった。専門家に巡回で見てもらっただけだったら保護者の承諾はいらないので。(不明)

周囲の児童生徒へのカミングアウトや説明に関する葛藤 (5 件)

64. 周りの子が嫌がる行動やルール違反する。周りの子に障害の特徴を説明するか否か。周りをどう納得させるか。(小)
65. 発達障害傾向の児童にとって、難解な場面で、他の児童に対して「その行為はこの子にとっては大変で、理解できないものなんだ」と伝えるべきか否か。障害の実情を伝えるべきか否か。(小)
66. 発達障害のためいじめにあい、体調を壊した子。特別支援学級に行くことを勧めたが、学級に残ることに。クラスの子にその子の状況を話すことが、その子にとって本当にいいことなのか悩んだ。(中)
67. 「こだわり」を持つ生徒のことを周りの生徒に理解させるために、伝えるべきか否かいつも悩む。(中)
68. アスペルガーの生徒。突然いなくなったり、体育祭のダンスを必要以上に一生懸命に踊ったり、いかにも他の生徒からすると不可解な行動。高2ということもあり、級友にアスペルガーであることを伝えるべきか。(高)

その他 (4 件)

69. 学習障害的な子に、どこまで補習をしていくか迷った。劣等感を持たせぬようにしたいという気持ちもあった。(小)
70. 自閉症で教室に入れなくなった児童。毎日、家庭に電話連絡を入れていたが、カウンセラーから「毎日の連絡する意義」を問われ、どうするか悩んだ。(小)
71. ダウン症の男子。素直で愛されるキャラクターで周囲の接し方も優しい。体育会の練習にも参加しているが、みんなでお世話している。しかし決して同等とは見なしておらず、上から目線なのが気になる。指導すべきかどうか。(中)
72. 発達障害の傾向が疑われる生徒。生徒は授業を抜け出す、給食を2回から投げ捨てるなどをし、学級の生徒が不満に思っている。学級の生徒を落ち着かせることと、生徒本人への支援、まずはどちらに力を入れるべきか。(中)

表 4 進路や学業に関する領域における教師の葛藤

本人の進路選択を支持するか否かの葛藤 (7 件)

73. 本人は中学受験を希望しているが、学力と生活態度を総合すると合格水準にない。中学受験をさせるかどうか。(小)
74. 学力が優秀なのに、本人も家庭も高校への進学を考えていない。(中)
75. 能力とかけ離れたところを受験したいと言う場合に、担任としてどう声をかけフォローしたらいいのか迷う。(中)
76. 本人の実力では志望校は難しいが、本人や親が強く受験を希望している。(中)
77. 保護者の養育能力なく経済的に厳しい。本人も学業が苦手で成績も低い。高校進学が希望。進学か就職か。(中)
78. 偏差値をもとにして入れる大学を勧めるべきか、本人の志望を優先するべきか。進学校では毎年のテーマ。(高)
79. 3年担任。授業中だけでなく朝のホームからよく寝ている生徒。生活態度を改めないで就職試験を受けさせられないと伝えたが、9月末になってもまだまだの状況。就職試験を受けるチャンスを与えないか、与えるべきか。(高)

親子で進路選択が対立した時の対応に関する葛藤 (2 件)

80. 本人の学力では明らかに難しい高校への進学を希望。親は別の高校にするよう説得中。担任からも子どもを説得してほしいと親に頼まれた時、時間をかけて本人に考え直すよう助言するか、本人の意思を尊重し励ますべきか。(中)
81. 親子で意見が対立した場合。子どもの意見を尊重しつつ、どう親と連携するか。(高)

特別支援学校進学を勧めることについての葛藤 (3 件)

82. 特別支援学級の児童。中学校進学で特別支援学校を勧めるべきか、地域の中学校の特別支援学級を勧めるべきか迷った。将来のことを考えると、特別支援学校がいいと感じていた。(小)
83. 発達障害がある中3男子。どんな進路が一番いいのか、特別支援学校を勧めたほうがいいのかも含め、悩んだ。(中)
84. 中学卒業後の進路で私立をすすめるか、特別支援学校への進学をすすめるか迷った。(中)

その他 (2 件)

85. 怠学傾向の生徒。学力を保障しなければならないが学校へ来ててもなかなか集中することができずにいた。空き時間で保障するのはもちろんだが、放課後の時間まで活用すべきか悩んだ。(中)
86. ある高校が定員割れになるから、進路で迷っている生徒をぜひ受検させてほしいと高校や校長から言われた。本人はプレッシャーを感じてしまいそうだが、受験をすすめるかどうか。(中)

表5 非行・問題行動に関する領域における教師の葛藤

本人への指導や関わり方に関する葛藤 (5件)

87. 授業中に抜け出して保健室へ来るようになったのを認めるかどうか。(中)
88. 問題を起こし他の生徒に悪影響があるような場合、その生徒を学校に入れて指導すべきか、それとも登校させないようにすべきか。(中)
89. 家庭的な問題を抱え、問題行動を繰り返す子に対して、弁当をこっそり渡していたが、それを続けるべきかどうか。教師として。(中)
90. 行為を叱る必要はあるが、話を聞くことも必要。どちらをメインで指導するか迷った。(高)
91. 不登校の高1男子を家庭訪問した際、家庭で喫煙しているようだった。母親は「外で吸うよりまだから黙認している」とのこと。指導すべきがどうか迷った。(高)

保護者との連携に関する葛藤 (9件)

92. クラスの友達のを自分のものにしたり、給食の残り物を盗んだり等の行動が続いたことを保護者に伝えるか否か。その家庭はDVの傾向があり、子どもが悪いことをしていると保護者は食事を抜いたり、暴力をふるったりしていた。(小)
93. 親に知らせるかどうか迷ったことがある。両親の過剰な反応が気になったので。(小)
94. 人に暴言を吐いたり、人の物を壊したりする児童の様子を保護者に伝えるべきか迷った。(小)
95. うそをつく、目の前で他の子を叩く子。母親に連絡しても「うちの子の言うことを信じる」という。同じように問題行動が出た時、連絡すべきかどうか、母親への接し方に悩んだ。(小)
96. 家庭の事情が複雑で、子どもの問題行動に対して父親が暴力をふるう。家庭への連絡に迷うことがあった。(中)
97. 軽度の問題行動があった時、保護者に連絡をするか、子どもを信頼してこれからよい関係を築こうとするか。(中)
98. 問題行動を起こした生徒の親が、わが子の問題を受け入れない、理解しようとしないうえに話が平行線で終わった。どのように話をすすめて指導していくか悩む。(中)
99. 喫煙、暴力、暴力をふるうが絶対に謝罪しない生徒。保護者と一緒に謝罪に行くというが、保護者が謝ってしまいそう。自分もいくべきか。(中)
100. 学校では大きな問題はないが、家庭で母親への暴力が日常的にあった男子。本人が改めるべきところもあったが、家の中の環境の悪さや母親のあり方に本人は相当の不満を抱いていた。担任として、母親と生徒のどちらとの相談を優先していくかべきか。(中)

その他 (3件)

101. 小6で担任した児童が進級し中学校で問題を起こしていると聞いた時、元担任として家に電話しようか迷った。(小)
102. 問題のある生徒の対応に追われる中、クラスの他の生徒との関係をどのように作っていくのか悩んだ。(中)
103. 保健室(養護教諭)の立場上、問題行動、非行の状況を聞く(例えば援助交際、妊娠、人工中絶等)。どこまで自分の中にとどめておくか、自分が指導できるか、あるいは、他の先生に伝えるかなど迷った。(高)

表6 いじめ・友人関係・学級経営に関する領域における教師の葛藤①

全体指導か個別対応かにまつわる葛藤 (3件)

104. いじめがあった時、担任として、どこまで広げるか、知らせるか悩む。(小)
105. 一部の子へのいじめがあり、それについてのクラスの問題として学級会で取り上げるべきか否かで悩んだ。(小)
106. 生徒は個別対応を望んでいるが、いじめの問題について、学級全体に指導しないと改善しなそうだった。それでも個別対応にすべきかどうか。(中)

保護者との連携に関する葛藤 (3件)

107. 友達へのかげ口をメモに書いていた児童の行為を、保護者に知らせるべきか迷った。(小)
108. 集団下校の時、帰る支度が遅くいつもみんなを待たせ平気である女兒。下校中そのことに文句を言われたことを母親が知り、どうにかして守ってほしいと訴えられた。その対応にとっても迷った。(中)
109. いじめを知った保護者から突然電話があり、関係者をすぐ呼べと言われた。事実確認をしてからということになかなか応じてもらえなかった。(中)

友人関係への介入のあり方に関する葛藤 (7件)

110. 男女間の悪い雰囲気のあるクラスに、どのように介入すべきかどうか。高学年の場合。(小)
111. 女子グループのリーダー的存在だった子が、仲間から孤立した。この状態の改善に向けて指導するか迷った。(小)
112. 以前まで仲良かったグループであったが、入院して戻ってきた子が相手にされていない様子。教師が中に入って話を聞こうとするが、本人はそれを拒む。静観するか、間に入るか。(小)
113. クラスの人数が少ないためか、友達関係がはっきりわかれてしまった。遊ぶ時も男女完全にわかれていた。遊びの幅が広がっていかなかった。故意に仕組むか否か。(小)
114. 一人になりがちの子(一人になるのが好きな子)に、こんなやり方をすると友達の輪に入りやすいと具体的に伝えることを迷った。(中)
115. 仲たがいをした二人を仲直りさせたいが、お互い仲直りしなくてよいと言われ、どうすべきか迷った。仲たがいのために、お互い情緒不安定気味。(高)
116. 子ども一人ひとり性格や気質が異なるなか、友人関係にどこまで介入すべきか、葛藤することが多い。(高)

表6 いじめ・友人関係・学級経営に関する領域における教師の葛藤②

いじめ事実が不明確な時の対応に関する葛藤 (2件)

117. 異常なほどの被害妄想のため、クラスの中の級友からいじめられていると訴えたが、調査しても事実が認められず、かといって放置しておくこともできず、解決方法に困った。(小)
118. いじめアンケートに「いやなことを言われる」と書いたA子がいた。その子が何をどの程度「いじめ」とらえているのか、判断に迷った。(小)

その他 (3件)

119. いじめをしている子に事実を言わせる際、どこまで言っていくか迷った。決めつけにならないように…。(小)
120. 思い通りにならないと暴力をふるう6年男子。昼休み担任が別の子たちと遊んでいた担任を独り占めできないのを我慢できず、「他の子を叩くぞ」というおどしを言う。その子の言うように遊んでやるか、無視するか迷った。(小)
121. 校内のある部活動内において、ブログ上でいじめられている生徒がいると、担任していた生徒から知らされた。どこまで介入すべきか迷った。(高)

表7 その他の教師の葛藤

その他の子どもとの関係に関する葛藤 (5件)

122. 子どもに指導したり一緒に活動したりする時間の確保と事務的(おたよりを出す)なことをする時間の配分。(小)
123. パレンタイムで、チョコレートは持ってこないように指導していた。友達関係作りに悩んでいて、よく声かけをしていた児童からもらった時に、もらうべきか否か迷った。(小)
124. 転入してきたばかりの6年女子。給食時、食べ物が口に入らないという事態!! 食べさせるか、そっとしておくか。(小)
125. 話を聞けない集団。静かになるまで待つのか、その時々には必ず注意をしていくのがいいのか。(中)
126. 中学まで不登校で高校に入ってから1日も休まないで登校している生徒から、誕生日プレゼントをもらった。本人は自分の誕生日にお返しができるのを期待している様子だったので、プレゼントを渡した方がいいのか迷った。(高)

その他の保護者との連携に関する葛藤 (7件)

127. 保護者から児童の生活面の支援についての要求が多く、学校で対応できないと保護者に伝えるべきか迷った。(小)
128. 明らかに甘やかしている保護者にはっきりそのことを伝えるか迷った。(小)
129. 子ども同士の言い争い、けんかを、どの程度伝えるか。(小)
130. 自分の都合の良い言い訳や嘘を言う保護者。きちんとすべきと伝えようか迷った。(小)
131. 一方的なクレームに対して反論するか、流すか。(中)
132. 夫婦間のことで子どもが悩んでいる時、どこまで入っていいのか。(中)
133. 生徒の保健室来室状況、過呼吸症状、パニック症状があり、あきらかに家庭に問題がある様子。保護者に対してアプローチすべきか否か迷った。(高)

同僚や管理職との関係・連携に関する葛藤 (8件)

134. 管理職から、6年担任をといわれたが、その学年の子と合わない子がいて、断るかどうか迷った。(小)
135. 同僚から担任を通さずに、同僚の子どもの心理検査(WISC)実施を依頼され、引き受けるかどうか。同学校に同僚の子どもが在籍していた。(小)
136. 中3の担任による三者面談の後、学年の中で成績のふるわない生徒と保護者に管理職が「自分が面談する」と言われた。学年主任や他の担任とも「ショックが大きすぎるのでは」と懸念した。(中)
137. 教育への基本的な考え方が異なる同僚、部下への指導。例えば、生徒の言動に鈍感である先生に、それを伝えるべきかどうか迷う。(中)
138. 中学校勤務時、皆が忙しく、校務分掌もかけもちする教員がたくさんいる。しかし、教育相談室に常駐の教員を置きたい。希望するか否か。(中)
139. 時に仕事をしない同僚がいると、嫌になる。仕事を回してもしないので、最後には自分がするはめになる。教育相談上、仕事をしてもらいたいことがある時、頼むかどうか迷った。(高)
140. 養護教諭。生徒からの内密の相談があったり、来室状況からケンカやいじめに気付く事が多い。他の先生に伝えるべきか否か。生徒と信頼関係を築きながら、問題を解決することができるか悩む。(高)
141. 気の弱い教師に対し、攻撃的に物を言う女性教師。チームとして仕事をしなければならない時に協調性が乱れ、嫌な雰囲気となることがしばしばあった。年配の女性教師なので言いにくい、どうするべきか。(不明)

外部機関や専門家との連携に関する葛藤 (4件)

142. お金だけを渡し食事を当てない母親。お金が減ってきて、パンの耳を弟と分けて食べていた女子生徒。親権のある母親に直談判するか、黙って関係機関に通告し即保護するか。(中)
143. 虐待の相談に対して、どの程度であれば専門機関に報告、相談するか悩んだ。(中)
144. 外部のカウンセラーの影響が強く、お母さんと学校、お母さんと他の保護者との関係が上手くいかなかった。学校側の意見を積極的に伝えるか、そのままにしておくか困った。(小)
145. 学校での問題行動等、ちょっとしたことを相談していいのかどうか迷った。外部の先生は忙しいので。(小)